様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５年　５月　２８日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２０１０～２０１２
課題番号：２２７２０１１１
研究課題名（和文）　英国ドキュメンタリー映画の伝統とブリティッシュ・ニュー・ウェーヴの総合的研究
研究課題名（英文）　A Study of the Tradition of the British Documentary and the British New Wave
研究代表者
佐藤　元状（SATO MOTONORI）
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：５０４３３７３５

研究成果の概要（和文）：本研究「英国ドキュメンタリー映画の伝統とブリティッシュ・ニュー・ウェーヴの総合的研究」は、イギリスのリアリズム映画の表象が、1930 年代から 1960 年代にかけて、どのように変容してきたのかを時代ごとに総合的に検証し、20 世紀のイギリス映画史を把握するための一つのパースペクティヴを提唱するものである。本研究の成果は、『ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学――イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学』（ミネルヴァ書房、2012 年）に結実した。

研究成果の概要（英文）：The aim of my study, “A Study of the Tradition of the British Documentary and the British New Wave”, is to examine how the British realist cinema developed its representation of the people from the 1930s to the 1960s, and thus to establish a perspective to understand the trajectory of the British film history. The result of my study, *The Poetics of the British New Wave: British Cinema and the Genealogy of Social Realism,* was published in 2012 by Minerva Press.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：イギリス映画・ドキュメンタリー・ニュー・ウェーヴ・リアリズム・モダニズム

１．研究開始当初の背景

（１）近年のイギリス映画研究の傾向の一つとして、研究対象となる期間を限定した時代論的なアプローチがあげられる。たとえば、本研究の核となる 1950 年代に特化した研究書だけでも、2000 年代前半に三冊出版されている。これらの研究は、1950 年代のイギリス映画の多様性と特殊性をさまざまな角度から検証している。こうした時代論的なアプローチは、精密な映画テクストの分析と幅広い映像資料や関連一次資料の精査に支えられており、英国でのイギリス映画研究の着実な進歩を強く印象づける。本研究はこの時代論的なアプローチに影響を受けており、1930 年代から 1960 年代までのリアリズム映画の表象を時代ごとに区分して考察していくこととなった。

（２）イギリス映画研究のもう一つの顕著な傾向は、通史的な視点である。リアリズム映画の系譜学を描き出そうとする本研究の支えとなったのは、ナショナル・シネマとしてのイギリス映画を包括的に検証する、通史的なイギリス映画史研究と、ドキュメンタリーという特定のジャンルの進展に焦点をあてた、より専門的な通史的研究の両者であった。

本研究では、（１）時代論的なアプローチと（２）通史的なアプローチをバランスよく取り入れることによって、イギリスのリアリズム映画の歴史的変遷をパノラマ的かつダイナミックに描き出すことを試みた。

２．研究の目的

本研究は、イギリスのリアリズム映画の表象が、1930 年代から 1960 年代にかけて、どのように変容してきたのかを時代ごとに総合的に検証し、20 世紀のイギリス映画史を把握するための一つのパースペクティヴを提唱するものである。その視点は以下の三つの歴史的視点に大別される。

（１）「ドキュメンタリー映画と第二次世界大戦」: イギリスがナショナリズムの色彩を強める 1930 年代から 1940 年代にかけて、ドキュメンタリー映画の運動が果たした社会統合的なイデオロギーの機能を分析し、この運動の後の世代への影響を考察する。

（２）「戦後の福祉社会の到来とフリー・シネマの誕生」:1940 年代の窮乏の時代を経て、福祉国家体制のもと、経済的な繁栄を謳歌しはじめる 1950 年代に、ドキュメンタリーを復権させる新しい試みであるフリー・シネマ運動が誕生した。1956 年を起点とするこの運動の意義を、同時代の「怒れる若者たち」の文学・演劇運動や、ニュー・レフト運動の意義と合わせて考察する。

（３）「ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴと 1960 年代以降の社会的リアリズム」: フリー・シネマの運動の担い手が中核となり、1950 年代末から 1960 年代半ばにかけて、イングランド北部の労働者階級の主人公とロケーション撮影を特色とする一連の長編物語映画を監督し、ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴと呼ばれる運動を形成した。この運動の意義を同時代的に読み解くと同時に、（１）、（２）の視点、および 1960 年代以降のリアリズム映画の表象の問題と連動させながら、通史的に考察する。

これらの三つの時代に固有の条件を分析することは、本研究の重要な課題であるが、それと同時にそれぞれの時代のリアリズム映画が直前の時代の表象のどの側面を継承し、どの側面に変更を加えたのかを検証することは、映画史的な視点からはより重要である。

本研究の最終的な目的は、（１）から（２）への移行、（２）から（３）への移行へ関心を払いながら、イギリスのリアリズム映画のダイナミズムを時代論的かつ通史的に描き出すことであった。

３．研究の方法

本研究は三年計画で実施されるため、本研究の柱となる以下の三つの時代の検証を一年ごとに順次進めていった。

（１）初年度にあたる平成 22 年度は、「ドキュメンタリー映画と第二次世界大戦」をテーマに研究を遂行した。同テーマに関する基礎文献の読解を続け、映像資料の視聴を幅広く行った。年度末の 3 月には、ロンドンの British Film Institute の National Library にて、ドキュメンタリー作家ハンフリー・ジェニングズの未公開映像を視聴するとともに、同時代の映画雑誌、業界紙、新聞、パンフレットなどの調査を行った。

（２）平成 23 年度は、「戦後の福祉社会の到来とフリー・シネマの誕生」を中心に研究を遂行した。同テーマに関する基礎文献の読解を続け、映像資料の視聴を幅広く行った。また当初の予定よりも研究が進捗したため、翌年度に予定していた「ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴと 1960 年代以降の社会的リアリズム」の研究にも踏み込むことができた。ロンドンの British Film Institute の National Library にて、ジョセフ・ロージーの 1950 年代の映像を視聴するとともに、同時代の一次資料の調査を行った。

（３）平成 24 年度は、本研究の最終年度にあたるため、「ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴと 1960 年代以降の社会的リアリズム」を主題に研究を進めるとともに、1930 年代以降のイギリスのリアリズム映画の表象の変遷を通時的な視点から描き出し、本プロジェクトの総括を行うことに力を注いだ。拙著『ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学――イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学』(ミネルヴァ書房、2012 年) は、本研究の三年間の成果のアウトプットである。本書の内容に関しては、「研究成果」の項目にて、記述する。

本研究のスムーズな進捗は、年度ごとの目標設定の適切さと海外でのリサーチの有効性に多くを負っている。当初の研究計画・方法の重要性を再認識することになった。

４．研究成果

（１）本研究の成果は、拙著『ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学――イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学』（ミネルヴァ書房、2012 年）に結実しているため、本書の要旨をもって、研究成果報告としたい。また本書は、2012 年に東京大学大学院総合文化研究科に提出し、受理された私の博士論文の中核をなしている。

本書では、現在ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴとして総称される映画運動に注目し、その波動をイギリス映画史の長期的な観点から把握するとともに、その映画運動を担った中心人物であるリンゼイ・アンダーソンとカレル・ライスとトニー・リチャードソンの重要な映画作品の読解を試みた。本書は、「フリー・シネマとイギリスのドキュメンタリー運動」、「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴとリアリズムの諸問題」、「スウィンギング・ロンドンの政治学」、「イギリス映画とメタフィクション」の四部から構成され、時系列に沿って、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの運動それ自体の軌跡と、その運動を担ったアンダーソンやライスたちの映画作家としての成長の軌跡の双方を重層的に描き出すことを目的としている。以下では、各部の内容を総括していきたい。

第一部「フリー・シネマとイギリスのドキュメンタリー運動」を構成するのは、第一章「イギリス国民の表象――ドキュメンタリー運動からブリティッシュ・ニュー・ウェイヴまで」である。第一章ではブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの前史となるフリー・シネマの運動に注目し、その運動の映画史上の立ち位置について精査した。フリー・シネマ・プログラムというドキュメンタリー映画の上映会として活動を開始したフリー・シネマは、それ自身の映画史上の立ち位置を自己演出する際にドキュメンタリー運動の異端児ハンフリー・ジェニングズを参照枠とした。その理由は、ジェニングズのドキュメンタリーが、アンダーソンたちにとって、「芸術としてのドキュメンタリー」の可能性を示唆するものであったからだ。しかし、ジョン・グリアソン以来のドキュメンタリー運動の歴史が明らかにするのは、「芸術としてのドキュメンタリー」は、「プロパガンダとしてのドキュメンタリー」と表裏一体の関係にあるということだ。こうしてフリー・シネマは、ドキュメンタリー運動の遺産を全面的に受け継いでいくことになるが、その遺産はフリー・シネマを経由して、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ以降の社会的なリアリズムにも継承されていく。

第二部「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴとリアリズムの諸問題」は、第二章「『土曜の夜と日曜の朝』の複眼的リアリズム」、第三章「『長距離走者の孤独』における風景のリアリズム」、第四章「方法としてのフラッシュバック――『孤独の報酬』における感情の風景」から成り立つ。ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの作品群は、イギリスのリアリズム映画の歴史について語る際に重要な位置を占めており、「労働者階級のリアリズム」、「詩的なリアリズム」、「社会的なリアリズム」など、さまざまな名称で呼ばれてきた。しかし、それらの名称は、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの作品群を包括的に記述するための、一般的なカテゴリーに過ぎず、個別の映画テクストを論じる際の根拠としては、不十分なものであった。第二部の各章では、これらのリアリズムのカテゴリーの批判的検証を、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの作品群のなかでもとりわけ重要な三つの映画作品のテクスト分析と対位法的に結びつけることによって、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴをめぐるリアリズム概念の刷新を意図した。

第二章では、「労働者階級のリアリズム」を「複眼的なリアリズム」という観点から捉え直し、ニュー・レフトの重要な論客リチャード・ホガートとライスの知的交流が、どのようにライスの映画作家としての成長に影響を与えていったのかを分析した。第三章では、映画研究者のアンドリュー・ヒグソンによる「詩的なリアリズム」についての考察を批判的に検証するとともに、リチャードソンの映画テクストを精査していくことによって、リチャードソンの「詩的なリアリズム」の政治的な可能性を浮き彫りにした。第四章では、アンダーソンの映画テクストを「社会的な風景」の探求から「感情的な風景」の探求への転換点として位置づけることによって、アンダーソンの「社会的なリアリズム」からの旅立ちの映画史上の意義について検証した。これらの三つの章を通じて明らかになるのは、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの「リアリズム」の多様性とそのラディカルな政治性である。フリー・シネマの美学＝政治学は、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの「リアリズム」映画にもしっかりと継承されているのである。

第三部「スウィンギング・ロンドンの政治学」は、第五章「真面目な事柄についてのコメディ――『モーガン』と表象の政治学」と第六章「『if もしも…』における帝国とコラージュの美学――叙事映画と帝国の表象」から成り立つ。この二つの章では、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの社会的なリアリズムからの政治的な後退として否定的な評価を与えられてきた、1960 年代後半のいわゆる「スウィンギング・ロンドン」映画に光を当て、その表象の美学的、政治的な可能性につ

いて検証した。ライスの『モーガン』とアンダーソンの『if もしも…』は、この二人の映画作家のブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ以降の最初のブレイクスルーとなった重要な作品である。しかし、その商業的な成功とは裏腹に、前者の作品は同時代のイギリスの映画評論家から、後者の作品は 1970 年代のイギリスの映画研究者から、致命的なほど辛辣な批判を与えられることになった。第三部では、このような否定的な評価の歴史化の作業を通じて、「スウィンギング・ロンドン」の時代に作られた、二つの希有な映画作品の再評価を試みた。

第五章では、ライスの映画テクストを「コメディ」として捉え直し、その主題とスタイルの喜劇性にポジティヴな要素を見出すことによって、モーガンの現実と空想の弁証法が孕む、ある種の政治的な可能性について考察した。第六章では、アンダーソンのテクストを「帝国映画」の文脈に位置づけるとともに、アンダーソンの新機軸となるブレヒト的な異化効果の映画技法に注目することによって、この映画テクストの美学的、政治的な可能性を浮き彫りにした。これらの二つの章を通じて明らかになるのは、スウィンギング・ロンドンの時代に作られた二つの映画作品の強靭な批判精神である。ライスとアンダーソンは、前衛的な映画作家として、表象の新たな可能性を探り続ける一方で、フリー・シネマを経由してブリティッシュ・ニュー・ウェイヴに引き継がれたニュー・レフト的な政治意識を手放すことは一度もなかったのである。

第四部「イギリス映画とメタフィクション」は、第七章「悟りの瞬間――『オー！　ラッキーマン』とメタフィクション」と第八章「『フランス軍中尉の女』と時間性のモンタージュ」から成り立つ。この二つの章では、繊細かつ難解なメタフィクションの構成を持ちながらも、これまで映画批評においても、映画研究においても、正面から論じられることの少なかった、アンダーソンとライスの中期から後期にかけての二つの作品を取り上げ、テクスト分析を試みた。アンダーソンのテクストにおいては、サイレント映画のフォーマットとドキュメンタリーのフォーマットが、ライスのテクストにおいては、時間性のモンタージュが、それぞれのメタフィクションを読み解く重要な鍵となっているのである。これらのメタフィクションの映画テクストが、アンダーソンやライスがスウィンギング・ロンドンの時代に切り開いた表象の戦略をさらに発展させたものであるのは、言うまでもないだろう。そこでは、美学としての強度と政治的なメッセージの強度が見事な調和を見せている。

レイモンド・ウィリアムズが主張するように、「リアリズム」とは、「方法＝スタイル＝美学としてのリアリズム」と「態度＝批判意識＝政治としてのリアリズム」の双方を意味し、その両者の関係は弁証法的に捉えられなければならないならば、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの「リアリズム」は、フリー・シネマに由来する、その美学＝政治学としてのリアリズムは、アンダーソンやライスのブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ以降の冒険にも大きな影響を与え続けることになるだろう。第一部から第四部にかけての通時的なテクスト分析によって本論文が目指したのは、アンダーソンやライスのリアリズムの美学＝政治学の連続性と切断の局面をダイナミックに描き出すことであった。

（2）本研究の国内外における位置づけとインパクト：拙著『ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学――イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学』（ミネルヴァ書房、2012 年）は、これまで表象文化論学会のニューズレターRepre 17 と日本映画学会の会報第 34 号に書評され、イギリス映画研究の新たな地平を切り開く試みとして、好意的なコメントを頂戴している。日本のアカデミーでは、イギリス映画の研究書は、皆無に等しく、社会的リアリズムというイギリス映画の「偉大なる伝統」の系譜学となる本研究が、日本におけるイギリス映画研究の先鞭となることを期待している。

本書の学問的なインパクトは、20 世紀全体のイギリス映画史を眺める上での大きな見取り図の提示にあり、その見取り図は、20 世紀のイギリス文化史を読み解く上でも重要な役割を担っていくになるだろう。本書の学問的な貢献は以下の二点に要約される。

①戦前のドキュメンタリー映画のリアリズムが、時代によって変質を遂げながら、戦後のフリー・シネマを経由して、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴに継承されていき、イギリス映画の重要な伝統を形成する点が明らかになる。

②ジェニングズやアンダーソンといった大学で英文学を学び、創作活動（絵画や演劇を含む）や社会運動や批評活動を通じて、同時代の文化に幅広く大きな影響を与えた人物に注目することによって、リアリズムの問題がイギリス映画史の分野にとどまらず、イギリス文化全般を読み解く際にも有益な視点であることが明らかになる。

（3）今後の展望としては、以下の二つの方向性を検討している。

①日本のアカデミーにおける現代イギリス

文化に特化した学問コミュニティの形成。2012 年の日本映画学会大会においてイギリス映画についてのシンポジウムを組織した経験から、英文学をバックグラウンドとしながらも、映像や音楽などポピュラー・カルチャーを柔軟に取り入れた、現代イギリス研究の可能性を強く感じている。イギリス映画研究の道を切り開くためにも、こうした柔軟な組織の開拓と研究者同士のコネクションづくりを今後の課題としていきたい。

②本研究のイギリスのアカデミーへのフィードバック。本研究の成果はすべて日本語で発表しているために、イギリスの読者には残念ながら届かない結果におさまっている。日本人のイギリス映画研究が本国の研究者たちに届くようなアウトプットを継続的に進めていくことを今後の重要な課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①佐藤元状、真面目な事柄についてのコメディ――『モーガン』と表象の政治学、慶應義塾大学日吉紀要英語英米文学、査読無、60 巻、2012、pp. 55 - 81

②佐藤元状、『フランス軍中尉の女』と時間制のモンタージュ、教養論叢、査読無、133 巻、2012、pp. 49 - 70

③佐藤元状、坂倉杏介、慶応義塾大学「アカデミックスキルズ」における映像教育、オーストラリア学会主催オーストラリア公開講座講演録、査読無、4 巻、2011、pp. 44 - 51

④佐藤元状、リチャードソンの『長距離走者の孤独』における風景のリアリズム、教養論叢、査読無、132 巻、2011、pp. 27 - 46

⑤佐藤元状、熱帯のフィルム・ノワール――リードの『文化果つるところ』における視線の政治学、コンラッド研究、査読有、2 巻、2011 年、pp. 12 - 25

〔学会発表〕（計５件）
①佐藤元状、社会的リアリズムとは何か？――ケン・ローチの美学と政治学、日本映画学会第８回シンポジウム「イギリス映画――「マイナー」映画のために」、2012 年 12 月 1 日、大阪大学豊中キャンパス

②佐藤元状、『フランス軍中尉の女』と時間制のモンタージュ、中央大学人文研公開研究会、2011 年 10 月 18 日、中央大学多摩キャンパス

③佐藤元状、坂倉杏介、慶応義塾大学「アカデミックスキルズ」における映像教育、オーストラリア学会主催シンポジウム、2011 年 7 月 2 日、慶應義塾大学日吉キャンパス

④佐藤元状、ブリティッシュ・ニュー・ウェーヴ再考、日本英文学会第 82 回全国大会シンポジウム「1950 年代を歴史化する」、2010 年 5 月 29 日、神戸大学国際文化学部キャンパス

⑤佐藤元状、『長距離走者の孤独』の＜孤独＞の表象、日本英文学会関東支部例会シンポジウム「英文学者は映画を語れるか」、2010 年 5 月 1 日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計２件）

①佐藤元状、ミネルヴァ書房、ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴの映像学――イギリス映画と社会的リアリズムの系譜学、2012、322

②佐藤元状、慶應義塾大学出版会、愛と戦いのイギリス文化史　1951-2010 年、2011、pp. 237 - 252

〔その他〕
ホームページ等
Hiyoshi Research Portfolio――「知」をめぐる社会との交流・協働の場
http://hrp.hc.keio.ac.jp

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　元状（SATO MOTONORI）
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：50433735

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし